

投稿論考：
文学作品にみる服装（国民服）の機能
——太宰治「服装に就いて」を読む

信州大学准教授 松本和也

SUBMITTED PAPERS

FUNCTION OF CLOTHES (THE NATIONAL UNIFORM) TO SEE IN A LITERARY WORK:
"FUKUSONITSUITE (REGARDING CLOTHES)" ATTENTIVE READING

Katsuya MATSUMOTO, Associate Professor, Shinshu University

In this article I discuss Dazai Osamu's "Fukusonitsuite (Regarding Clothes)".

"Fukusonitsuite (Regarding Clothes)", is a novel in which the hero (watashi) thinks of about the national uniform. In the precedent study, Osamu Dazai has been identified with the hero. In contrast, an aim of this article is to give meaning to "Fukusonitsuite (Regarding Clothes)" historically.

At first I analyzed contemporary articles about the national uniform. I mainly investigated magazines called "Kokuminhuku (the national uniform)" on this occasion. As a result, I made clear that the national uniform was a device to unify the nation.

Based on the above, I interpreted "Fukusonitsuite (Regarding Clothes)" from the viewpoint of consciousness about clothes. The hero understood the functions of clothes and the national uniform well. At the end, I gave meaning to the last paragraph of the story considering the above examination.

I concluded that "Fukusonitsuite (Regarding Clothes)" was a novel which continued asking about the new situation surrounding the men's national uniform. (This opinion is criticism for the precedent study.)

1

太宰治「服装に就いて」(『文芸春秋』1941. 2)は全集にして17頁の短編で、語り手「私」の服装をめぐるエピソードの連鎖によって構成されている。内容(時間軸)としては、「弘前高等学校一年生の時」から「今の此のむづかしい世の中」まで、回想形式によっておよ

そ 14 年間におよぶ服装をめぐる言動や意識が、主には失敗談として綴られていく。総合雑誌に発表された「服装に就いて」は、少なからぬ同時代評が散見されるにもかかわらず、《研究史上手厚く遇されてきた作品とはいえない》(註1)。

そこで、まずは断片的につみあげられてきた先行研究を確認しておきたい。作家論的な見地からは、《太宰の服装についてのなみなみならぬ関心がうかがえる》という奥野健男が、《服装について語りながら、自己の宿命を、芸術家と市民との関係にふれている文明批評とも言えよう》と評している(註2)。同様の観点から、東郷克美は「服装に就いて」を《滑稽なまでの都会志向を戯画化したもの》とみている(註3)。木村小夜による事典記述でも、やはり作中の「私」を太宰治本人と見立てた上で、次のように概評している。

[評価] 日常着をめぐる思い出に作者の心境が託される。安定した現在の生活がまぎれもなく過去の自身から連なっている現実の苦さを受けとめながら、なおかつ「最高の誇りと最低の生活」を理想としたい姿勢がうかがえる(註4)。

同時期に、はじめて「服装に就いて」のまとまった論及を展開した佐々木啓一は、《装飾性に価値意識を置く太宰にとっては、国民服は、最も忌わしい服装に違いない》としながら、テキストの結び「宿題。国民服は、如何。」に注目して、《「永遠に敗者」である自己(太宰治/引用者注)の弱さからの、時代に対するプロテスト》を読みとっている(註5)。佐々木同様に井上愉一も、テキストの結びに注目し、まずは《「国民服[に代表されるイデオロギーを受け入れて国民服を着れば、友人たちに服装のことで非難されることはないが、そういう考え方]は、如何(それでいいのだろうか?)。》へと《書き換え》てみせる(註6)。その上で、やはり結びが《時代に対する多少のプロテストを含んでいる》と判断し、その理由を《謎語的な小説の構成》にみて、次のように論じている。

そもそも、この時代に〈服装に就いて〉書いていながら、現下最大のトピックであるはずの国民服について、末尾まで一切コメントせず、やっと末尾で触れても〈これから考える〉という意味のことをいうにとどめるというこの小説構成自体が、既にしつぽう的であり、プロテストとみられるということである(註7)。

先行研究史で「服装に就いて」とは、作家・太宰治の服装に関する自意識の反映として把握された上で、結びに時代に対する作家のスタンス(抵抗)が読みとられてきたのだ。では、発表当時の同時代評においてはどのような論点が議論されていたのだろうか。

新聞評では、山岸外史「文芸時評④時代の寒気」(『都新聞』1941・2・1、p.1)があり、《太宰治氏の悲惨なる諧謔》という作家論的把握に即して、《悲惨なる諧謔に目を蔽ふ気持をもつて読み始めたが中途哄笑し末尾でまた真面目になつた》と、ストーリー展開に伴う喜劇性／真面目さの振幅を読みとられている。また、《創作欄では太宰治の「服装に就いて」が面白い》という五三桃「大波小波 勝れた選択『文芸春秋』二月号」(『都新聞』1941・1・24、p.1)では、《自己をモデルにした鋭敏な文明批評》と高く評価され、この時、作中の「私」は太宰治本人と重ねられている。木々高太郎は「文化時評(5)二月の小説」(『東京日日新聞』1941・2・2、p.3)で、《太宰治氏「服装について」は二十年依然たる貧しい私小説》と、ジャンル把握と併せて全否定している。

雑誌評では、無署名「文芸春秋」(『三田文学』1941・3、p.137)が最も好意的である。《太宰治の「服装に就いて」は面白い》と判じた上で、《ある人によれば面白くない私小説だといふ。さうもいへるが、彼が、何か舌たらずながら、人生を見、それを批判してゐるのである。みづみづしい文章であるし、その角度は愛するに足るものといへる》と、作品を擁護している。石田英二郎「二月の小説」(『新潮』1941・3、p.99)になると、「服装に就いて」が《太宰の焼舌な自意識過剰なモノロログ》だと評され、《しかし、その自意識過剰の自己解剖の結果が、意義あるものをみつけ出してゐるとも見えない》と否定的に捉えられている。《「服装に就いて」は物足りない》という広瀬進「創作月評」(『文庫』1941.3、p.42)の《あまりに随筆的だ》という指摘も、やはり太宰治本人を想定しての評と思われる、そのことは《心構へに深いものがある》という作家の存在を前提とした評言にもみてとれる。《自己の服装を語って達者な話術を發揮してゐる。読んで楽しい短篇で一寸魅力がある》という好意的な批評を寄せたT・Y「「文芸春秋」「新潮」作品評」(『文芸』1941・3、p.179)でも、反面《耳ざりな口調の節々でこの舌芸未だし》という感想も洩らされ、《技巧や才気一方の側の作家でなくて精神の側の作家となるためには、まづ第一に、ちよいと気の利いた下げを洩らして引込む癖は止めた方がよい》と、この時期の太宰作品にみられる《癖》が批判されている。

さらに、単行本では宮田戊子「太宰治氏の「東京八景」其他」(『近代日本文学の分析』霞ヶ関書房、1941、p.301)があり、そこで宮田は《『服装について』は随筆的な作品であるが、やはり自分自身のことを書いてゐるものらしい》と受けとめた上で《この作品が微笑をもって読まれるのは、作者の劣等感とナルチスムスが相互に波動状をなして表現されてゐるため》と、太宰治その人を前提としつつ、小説表現を好意的に捉えている。

してみると、同時代評においては先行研究同様、作家・太宰治が「服装に就いて」の紙背に想定されてはいるのだが、服装に関することごとよりは小説の表現・筆法への論及が目

立ち、また結末部がことさらに注目を集めてはいなかったことが確認できる。

ここで双方を重ねあわせてみると、評言こそ私小説から随筆まで振幅はあるものの、「服装に就いて」をめぐっては、その紙背に作家・太宰治の存在が感知され、その書き手を前提に小説表現を意味づけるというのが作品理解の共通点であり、別言すれば 70 年近くかわらない読み方の主流だといえる。逆に、発表当時には論及のなかった、服装に関する作家論的自意識や（結びに注目した）作家の時代に対するスタンス（抵抗）は、戦後の研究史において見出されてきた新たな論点だということになる。

そこで本稿では、こうした「服装に就いて」の同時代評・先行研究の論点をふまえ、その不備を補いつつ、いくつかの操作をくわえることで、同作の歴史的意義を明らかにしたい。具体的には、「服装」（国民服）を問題とするに際して、紙背に作家を想定せずにテキストそれ自体を精読し、結びの一行（のみ）に集中してきた読解をテキスト全体へと及ぼし、漠然と意味づけられてきた時代との交錯を具体的な歴史一言説をふまえて考察したい。

2

本節では、前節で確認した「服装に就いて」の受容・研究史／概要—特徴をふまえつつ、発表当時の国民服をめぐる言説を分析する。昭和 15 年、国民服が話題になっていくことの要としては「国民服令」（昭和 15 年 11 月 1 日、交付即日施行、勅令第 725 号）がある。ただし、服装（国民服）をめぐる議論—法案が一朝一夕になったわけではない。

一例として、次に引く、小山松吉「報知講壇 国民服の制定」（『報知新聞』1938・5・1、p. 3）をみてみよう。

我が国民生活には幾多の改善すべきものがある。従来生活改善会は設けられて、日常生活の改善すべきものが研究せられたが、その成績は思はしくなかつた。しかるに近頃国民服制定の意見が一部の人々によつて唱へられ各方面に賛成の声がある。速やかに適当なるものを制定し、実行せられんことを希望する。〔略〕今日は有史以来未曾有の時局であり、厚生省は新設せられ、国民構成運動の提唱せらるゝ時であるから、われ／＼は断然情実やある趣味などを排斥し、一定の簡便なる国民服に転向すべきであると思ふ。

ここでは、《時局》への《国民》の対応として国民服（の必要性）が論じられており、日中戦争開戦以後、各雑誌で散見されるこうした発言の基底が確認される。もちろん、理念的には憂国生「読者眼 国民服の行方」（『読売新聞』1939・7・6、p. 2）に《国民服はその

名の通り国民服とし、上は大臣重役より下は雇員、職工に至るまで普及せしめねばならぬ」とあるように、《平等なところに存在の価値》がおかれてもいた。国民服導入の積極的な提唱者でデザイナーの齋藤佳三は、一連の発言を『国民服の考案』（秋豊園出版部、1939）にまとめるが、そこで国民服の必要性は次のように意味づけられている。

我日本は今、大亜細亜に新秩序を立て、皇道世界維新に向つて行進する基礎のために飽くまでも独自なる生活文化の根本を造らなければならぬ処に立つものである。堅忍持久、遠大な謀りごとを以てしても然も過たず、今日からでも国民生活として緊要な国民服を制定しなければならない処に臨んである次第である。(p.11)

ここでもやはり、『時局』への《国民》の対応として国民服（の必要性）が訴えられている。それは一人齋藤の声というわけでもなく、例えば一帰還兵「読者眼 国民服強制」（『読売新聞』1940・4・20、p.2）には《聖戦の真の姿を目に見、心に味はすために国民服を強制せよ》といった言明がみられもする。もっとも、こうした議論が単線的に国民服の制定・流通へとつながったわけではなく、むしろ国民服（への理解）が思うように広まらないという状況が、上のような言表を反復させていったのだ。事実、井上雅人によれば、国民服の定着は、服自体やその理念的意味づけによって進められたのではない。

国民服やもんぺが一気に広まった原因は空襲で、しかしそれは空襲が起こる以前に、空襲の際には身体性を確保するような衣服を着けなければいけないという概念の共有があったからこそ、一気に広まった。そして、その底辺には非常時と衣服を結び付ける時のボキャブラリーの貧困さ、つまりは、身体性を確保するための衣服をあまりにも知らなかったという状況があったことも見逃してはならない（註8）。

こうした現実、さらには「服装に就いて」の様態をふまえ、本稿では、雑誌『国民服』に注目する。『国民服』とは、井上雅人によれば次のような使命を担った雑誌である。

『国民服』は、国民服という、すべての男子国民がすべての場所で着用できるようにと考案された。総動員体制を目に見える形で支えようとした衣服についての言説の場として用意され、標準服という女子国民のための衣服を産み落とした現場でもある。『国民服』はその後『衣服研究』と解題され、通関二四号まで、約四年間にわたって発行され続け、衣服という非常に日常に近いレベルの問題から出発して、生活全般の

多岐にわたっての話題を提供し続けた（註9）。

ここで指摘されるように、国民服とは国民の意識（内面）をそれと可視化する装置であり、それゆえ国民服の定着は、国民意識の可視化された統合シンボルともなり得る（註10）。

1941年創刊の『国民服』は、いささか過剰なかたちで、こうした発想一方針を後押ししていく。次に引く有田實「衣の高度国防化」（『国民服』1941・10、p. 110）では、実用的な面にくわえ、装置としての側面が色濃く打ち出されている。

男子用国民服制定の主旨と軍事的意義に就いては茲に再説を要しないが、其の眼目は畢竟するに国民衣服の国防化であり衣服文化の革命的発展である。〔略〕幸ひにして制定国民服は世界服装文化の水準を抜き且つ日本精神を表徴する独自のもので、国民の歓迎を受け此の理念と形式とが学生服に労働作業服に運動服に逐次採用されるようになったのは甚だ意を強くする処である。

《国民服／国民》といった言葉が用いられるのは従来通りだとして、ここでは日本を際立たせる参照枠として《世界（服装文化）》という言葉に注目したい。つまり、国民服とは単に国内向きの施策にとどまらず、世界史という視座において日本が展開していく時局一戦争と連動した装置でもあるのだ。その基底にして前提となるのが《服装は精神に影響し、精神は服装を規整する。両者健全であって、正しい服装文化が生れるのだ》（『国民服』1941・10、p. 120）といった精神（不可視のもの）と服装（可視化されたもの）を直接的に結びつける発想であることはいうまでもない。

こうした国民服に通底する装置としての機能（ぶり）は、福田清人「創作 服装」（『国民服』1941・11、p. 96）において、つぎのように肉づけされもする。

草吉が一昨年、初めて満洲の旅をした時、つくづく感じたことのひとつは、あの新しい国が生れて十年もたぬ間に、あのやうに見事に統一され、発達しつつある原因には衣服が強い作用を及ぼしてゐるということであつた。つまり共和服の制定と普及である。

ここでは、《共和服の制定と普及》とが国家の《統一》の要点／シンボルだと、はっきり示されている。こうした媒体にあつては、《国民服を着用する事に於て日本人としての意識を更に強め時代の難局を乗り切る為に活躍を期すべき》だという八木静一郎「国民服の進

路」(『国民服』1942・1、p. 110)が指摘する通り、《此の意味に於て国民服の持つ使命は更に重きを加へてゐる》ということになるのは必至である。

このように、明確な国民統合のシンボルとして国民服を意味づけ、それが時局に処す国民にとって重要な装置であることが、『国民服』誌上ではくりかえし言表されていくのだが、最後に、こうした要点がぐだけた口調で示された座談会をみておこう。それが戦場帰りの文学者を招いての、三木清・火野葦平・上田廣・柴田賢次郎・中山省三郎・石原通「座談会 新生活と服装を語る」(『国民服』1942・3)である。ここで戦争文学の話題作「黄塵」の作者である上田は、次のように発言している。

背広から国民服に着替へたといふことだけでは、それだけでも行詰りがきてしまつて、別になんでもなくなるといふ風になって来ると思ひます。ですから国民服の問題も、単に国民服の問題だけでなく、もつと本質的な生活的な問題を含んで居るといふ風に考えてよいと思つて居るわけであります。(p. 30)

ここでも、国民服は(可視化された)服の問題であると同時に(不可視の)《本質的な生活的な問題》でもあるとされ、両方の要素が一体化することが重要だと説かれている。日中開戦以降、戦争を肯定的に意味づけていく哲学者の三木清もこうした捉え方を肯定し、《生活とそぐはない国民服になつてしまつては何にもならないでせうから、生活の中に国民服が融け込むという風に、生活全体が一つの国民服なら国民服といふものに調和した生活になつていかなければならないのだと思ひます》と発言している(p. 31)。《生活》と《服装》の《調和》を掲げたこの言表は、さしあたり(可視化された)外見だけかえても意味がないという至極当然の趣旨と読めるが、『国民服』誌上で蓄積されてきた国民服の内包をふまえれば、“外見も内面も一体化(《調和》)させて戦争を遂行する国民たれ”というあからさまなプロパガンダでもある。事実、《国民服を着てゐる人々が次第に目につくやうになつた》と指摘する雅川滉は、「大波小波 国民服の榮譽」(『都新聞』1941・11・5、p. 1)で《国民服は単に便宜のためのものではあるまい。国民服を着るからには、国民たるの榮譽や自覚もまたともに撥はねばならぬであらう》と述べているし、小島生寄「鉄箒 国民服」(『朝日新聞』1941・4・29 夕、p. 1)にも《国民の全階層が、国民服を着用するときは、すでに国家意識を固めあたかも国民服のごとく、一致した理念を持つて、歩武を合せ、協力して進むことを前提としなければならぬ》と言表されている。

総じて、国民服をめぐる言説とは、単に国民服の着用を促す時局的な動向にとどまるものではない。そうではなく、服装という可視化された媒体を通じて、その内面をまでもソ

フトな回路によって国策の管理下におき、国民を、改めて戦争を肯定・遂行する国民として主体化—統合していくための装置なのだ。従って、「服装に就いて」によって作家・太宰治が時代へのプロテストを試みていた、あるいはテキストにそのような意図が託されていたというならば、こうした国民服言説との具体的な切り結びを検証する必要がある。

3

本節では、前節の同時代言説の分析（成果）をふまえつつ、「服装に就いて」のテキスト分析を試みていく。

「服装に就いて」は、「私」という語り手—主人公が、服装をめぐる過去を回想していくスタイルであることを示しながら書き起こされていく。冒頭部からみていこう。

ほんの一時ひそかに凝つた事がある。服装に凝つたのである。弘前高等学校一年生の時である。縞の着物に角帯をしめて歩いたものである。そして義太夫を習ひに、女師匠のもとへ通つたものである。けれどもそれは、ほんの一年間だけの狂態であった。私は、そんな服装を、憤怒を以てかなぐり捨てた。(p. 388)

語り手「私」は、「服装に凝つた」・「弘前高等学校一年生の時」を、さしあたり現在とは切り離された過去として、回想し始める。そのことは、「一年間だけの狂態」といった表現からも十分に読み取れる。それでも、この自分は自ら意識的に服装に「凝」り、その延長として義太夫を習いもしたようだが、服装（および言動）が与える他者への印象は、自分自身ではコントロールすることができない。いかに弘高時代の「私」が「粹人の服装」を気取ろうとも、おでんやの姉さんには「兄さん東北でせう」といわれてしまうように、自己像は、(さまざまな環境・条件下にある) 他者によって実に多様に現象する。鷲田清一による《服装というものはそのひとの社会意識、あるいは他者たちのなかのじぶんというものの意識を、いやがおうにも映しだす》という指摘は(註11)、テキストにも刻まれている。

「それからは、普通の服装をしてゐるやうに努力した」という「私」だが、「普通」という判断もまた、自身の思惑／他者への映じ方とが必ずしも一致するものではなく、当然ヘゲモニーは後者に委ねられている。しかも、身体自体も服装の延長として他者に映じる以上、「普通」たらんとした「私」が次のように困惑するのも致し方のないことといえよう。

けれども私の身長は五尺六寸五分（五尺七寸以上と測定される事もあるが、私はそれを信用しない。）であるから、街を普通に歩いてゐても、少し目立つらしいの

である。大学の頃にも、私は普通の服装のつもりであたのに、それでも、友人に忠告された。ゴム長靴が、どうにも異様だと言ふのである。(pp. 388-389)

ことさらに意匠を「凝」らさなかったにもかかわらず、「少し目立つ」・「どうにも異様」といった印象を服装（とその延長である身体）によってもたらす「私」とは、別のいい方をすれば、他者の視線につねにアンテナを張り、それを内面化していく自意識過剰な人物でもある。そうした「私」であれば、服装に「凝」ろうが「凝」るまいが、周囲に自身ではコントロール不可能な他者（の視線）が存在する以上、ついには同じことである。

私は高等学校一年生の時に、早くもお洒落の無常を察して、以後は、やぶれかぶれで、あり合わせのものを選択せずに身にまとひ、普通の服装のつもりで歩いてみたのであるが、何かと友人たちの批評の対象になり、それ故、臆して次第にまた、ひそかに服装にこだはるやうに、なつてしまつたやうである。(p.390)

このように自身と服装との関係を、回想という形式（現在から対象化した過去）によって語る「私」は、服装に囚われていることに自覚的である。ただし、その要因を、印象は他者にしか決められないという原理的な事情ではなく、別のところにみている。「与へられるものを、黙つて着てみる」「衣服や下駄は、自分のお金で買ふものでないと思ひ込んでゐるらしい」という「私」は、他者への《印象操作》(E・ゴッフマン)を十全に行えない理由を、服装に関する選択や投資を回避するという自身の言動の帰結だと考えている。

ただし、それが服装への関心の低さを示すものではなく、逆に自意識の裏返しであることは、次の「洋服」に関する積極的な語り（「ついでだから言ふが」）にも明らかである。

ついでだから言ふが、私は学校をやめてから七、八年間、洋服といふものを着たことがない。洋服をきらひなのではなく、いや、きらひどころか、さぞ便利で軽快なものだらうと、いつもあこがれてさへゐるのであるが、私には一着も無いから着ないのである。洋服は、故郷の母も送つて寄こさない。また私は、五尺六寸五分であるから、出来合ひの洋服では、だめなのである。(p. 396)

ここでは、服装への裏返された関心が示されると同時に、結末で登場する「国民服」と対置される「洋服」が伏線として導入される。こうした「洋服／国民服」というテキストが基底で示す対比の構図は、同時代における「私」の存在理由を問う働きも併せもつ。

今の此のむづかしい世の中に、何一つ積極的なお手伝ひも出来ず、文名さへも一向に挙げず、十年一日の如く、ちびた下駄をはいて、阿佐ヶ谷を徘徊してゐる。けふはまた、m 念入りに、赤い着物などを召してゐる。私は永遠に敗者なのかも知れない。
(p. 401)

「今の此のむづかしい世の中」という時局がテキストに導入されると、服装は単なる服装以上の意味をもって「私」を取り囲んでいくことになり、「私」もそのことに自覚的である。「積極的なお手伝ひ」ができていないだけでも存在意義が問われる時局を意識しつつ、「赤い着物」というミスマッチな服装がそのことに輪をかけ、ついには自身を「敗者」と意味づけていく。これは藤原耕作が「服装に就いて」における《〈服装〉》の《奇妙な機能》として指摘した《着用者の内面を規定する》に該当するはずだが（註12）、「私」の立場からすればそうした機能を逆手にとっての、時局に即した服（たとえば「国民服」）を着ないというパフォーマンスでもある。ただし、それが「普通」たらんとした意識の帰結だとしても、結果として他者にどのように映じるかについては「私」も知悉しているはずだ。

そうした時局を導入した作中世界においては、服装は可視化された表層であるばかりでなく、不可視の深層（内面）までもが一体化されて明示される装置である。だから、国民たらんとすれば国民服を着ることが規範となるのだし、逆に「赤い着物」を着ることは、（結果論にせよ）模範的な国民からの逸脱をアピールすることにもなる。極端ないい方をすれば、こうした条件下では、本心を画すべきスペースが奪われていくことにもなり、語り手「私」は「衣服が人心に及ぼす影響は恐ろしい」と語る。服装のせいで「非常に卑屈な気持で酒を飲んでゐた」夜、友人は「どうした事か、ひどく元気で、古今東西の芸術家を片端から罵倒し、勢ひあまつて店の主人にまで食つてかかつた」。この時、「この主人のおそろしさを知つてゐる」という「私」が思い出していたのは次のようなエピソードである。

いつか、この店で、見知らぬ青年が、やはりこの友人のやうに酒に乱れ、他の客に食つてかかつた時に、ここの主人は、急に人が変わったやうな厳肅な顔になり、いまはどんな時であるか、あなたは知らぬか、出て行つてもらひませう、二度とおいでにならぬやうに、と宣告したのである。(pp. 402-403)

この主人にとっては、客の店でのふるまひは、「私」の考える服装と同じ装置として映じ

ている。だから、酒乱という可視化された言動は、主人にはそのまま客の本心の表面と受けとめられ、時局（「いまはどんな時であるか」）にふさわしからぬ（可視化された）言動として退店・出入り禁止を命じられることにもなっていくのだ。

そうした前例をふまえ、主人の逆鱗にふれないようにという意図（内面）をもって、主人を意識しながら、私はあえて友人に対して「しつかりし給へ。」といいながら平手打ちをし、ことを収めようとする。ところが、殴られた友人は「「やあ、殴りやがったな。このままでは、すまんぞ。」と喚」きだす。つまり、友人には「私」の糸は伝わらずに、殴ったという行為だけが伝達されたことになる。そうであれば、突然殴られた友人が怒るのはもつともであり、それが店の主人にどう映じたかもまた自明である。「たうとう待つてゐるものが来た」と観念する「私」に対し、主人は「どうぞ外へ出てください、他のお客さんに迷惑です、と追放令」を「宣告」するのだ。そうであれば、作中世界ではすでに、可視化された服装（表層の現象）は不可視の内面（本心）と一体化されていることになる。そうした事態の進行が蔓延しつつあることを、「私」は改めて思い知らされたのだ。

考へてみると、さきに乱暴を働いたのは、たしかに私のはうであつた。弁慶の苦肉の折檻であつた等は、他人には、わからないのが当然である。客観的に、乱暴の張本人は、たしかに私なのである。(p. 403)

ここで注目すべきなのは、ことの帰結をやはり服装に求めていく「私」の発想である。

つくづく、うらめしい、気持であつた。服装が悪かつたのである。ちゃんとした服装さへしてゐたならば、私は主人からも多少は人格を認められ、店から追ひ出されるなんて恥辱はうけずにすんだのであらうに、と赤い着物を着た弁慶は夜の阿佐ヶ谷の街を猫背になつて、とぼとぼと歩いた。

つまり、「私」にとっては、あくまで失敗の根因は「服装」にあり、逆にいえば「ちゃんとした服装さへしてゐたならば」自体は異なつたはずなのだ。これは「服装」の捉え方としては奇矯かつ極端なものにはちがいないが、「服装に就いて」に関して重要なのは、それが「私」にとって疑うべからざる確信に基づいているということだ。

しかも、それは戦局が悪化した昨今にわかには抱いた確信ではなく、「弘前高等学校一年生の時」以来、「服装」との持続的なかわりを通して、いわば主体と連動して形成されてきた服装感なのだ。そうした過程において「私」は、服装に関する高い自意識を保持しつ

つ、着用した服を通じて他者にまなざされ—意味づけられることを学び、しかも自らの《印象操作》がほとんど奏功しないことも思い知らされてきた。にもかかわらず／それゆえ、服装は外部からは不可視のはずの内面を他者へと示してしまう装置でもある。そうであれば、「国民服」を云々する以前に、「私」は本稿第2節で検証した「国民服」の装置としての機能—機制をすでに内面化した人物として自己表象していたことになる。いいかえれば、服装をめぐる自己形成を遂げてきた「私」とは、《衣服の選択が社会化されている》(註13)ことを、それが半ば強制的に展開される国民服以前に、身を以て知悉していたのだ。ならば、ここまでの議論をふまえた時、結びの一行は、どのように捉え返すことができるだろうか。

4

先に検討した居酒屋でのエピソードを語り終えた「私」は、次のような感懐をもちます。

私は今は、いいセルが一枚ほしい。何気なく着て歩ける衣服がほしい。けれども、衣服を買ふ事に於いては、極端に吝嗇な私は、これからもさまざまに衣服のことで苦勞するのではないかと思ふ。(p.404)

前節までの読解に即して読むならば、上の一節を字義通りに受けとめることは難しい。というのも、「何気なく来て歩ける衣服」、つまり「普通」の衣服を着たところで、他者によって奇異にまなざされてしまえば「異常」になってしまうことを、「私」は経験的に知っているからだ。また、「けれども」以降に関しても、「衣服の事で苦勞する」理由が「吝嗇」というのは別の所にあることを知らない「私」ではないからだ。テキストを通じて、今も昔も、服装をめぐる失敗を反復してきた「私」にとって、だから正確なのは「これからもさまざまに衣服の事で苦勞するのではないか」という推測／予言だけであるはずだ。

となると、上の一節は問題含みである。整理してみよう。一文めが本心ならば、「吝嗇」ゆえに「いいセル」は手に入らない。二文めが本心ならば、「私」にとって「何気なく着て歩ける衣服」など存在しない以上、やはり手に入らない(もちろん、衣食に費やす金銭があっても「何気なく着て歩ける衣服」は手に入らない)。三文めについては、「苦勞」の予言はこれまでの経緯からも妥当に見えるが、その主体(主語)が、「衣服を買ふ事に於いては、極端に吝嗇な私」と設定(修辭)されていることで、やはりノイズをもたらす。というのも、「私」自身のそれまでの言明に即せば、第一に「私」が服装に低からぬ関心をもつ

ており、第二に《印象操作》のヘゲモニーは他者に握られているからである。

総じて、上述の引用箇所は、「ほしい」「ほしい」「思ふ」といった、あたかも心情をとろしたかのような言葉を表層では用いながら、そのことによって「私」の内面を不可視の深層へと隠すレトリックなのだ。乱暴にいつてしまえば、「私」による嘘の言明に他ならない。

しかも、そのような「私」のあり方を、「今は」という時間軸に据えつけていたことも見逃せない。「今は」という現在と、「これから」という未来の対比を設定した上で、テキストはようやく急激な話題展開である結末の一行を、シームレスに迎えることになる。

宿題。国民服は、如何。(p.404)

この一行を《読者への問題提起》と捉えた神谷忠孝は、《国民服を強要しておしゃれの自由を奪う政府への抗議ともとれるし、あるいはまた、服装が統一されれば服装に就いて悩むこともなくなるから賛成だというようにもとれる》と二通りの解釈を示している(註14)。こうした理解は、本稿第1節でとりあげた先行研究でも濃淡こそあれ共有されているが、ていねいにテキストを読むという立場からすると、少なくとも三つの点で再検討を要する。

第一に、《読者への問題提起》という捉え方は必ずしも自明ではない。語り手「私」による自問自答とも読みうるし、《読者》という単語を用いる場合、その具体的な内実(同時代読者/作中読者/漠然とした曖昧な読者)が不分明すぎる。第二に、当該箇所だけをとりだした読解はテキスト全体の連携一意味作用を軽んじすぎており、結びが重要というならなおのこと、少なくとも本節でも引用した直前の一節との関係から解釈を試みる必要がある。第三に「宿題」とは、単なる課題ではなく、時間軸からいえば未来を孕んだ課題であるはずで、居酒屋のエピソードによって導入された時局を含め、テキストの軌跡を関数として孕みこんだ上で、これ以後における国民服に対するスタンスが問われているのだ。

従って、本稿の読解を振り返ってみれば、結びの一行をクローズアップして「服装に就いて」を作家・太宰治のスタンス(抵抗)を示したものと意味づける読み方は、解釈可能性として排すことはできないものの、妥当性は必ずしも高くない。というのも、国民服が人々にもたらす装置としての作用については、テキストに「国民服」が登場する以前、服装に関する語りのうちに看破一別決されていたのだから。また、現実世界でも国民服への(明示的な)批判や疑義は少なからず展開されており(註15)、「服装に就いて」を国民服批判の文脈で特筆する理由は見当たらない。そうであれば、「宿題」とは服装(一般)が内面を外面と一体化一可視化する装置として機能している状況をふまえた上で、「国民服」がいかなる新たな事態をもたらすのか、そしてそれにどう処すべきか、という課題であるはず

なのだ。

こうした「私」にとって、国民服が流通することでもたらされる新たな事態とは、《国民服は、あらゆる人人の外的特徴を、ある程度失はせる》(小島生寄「鉄箒 国民服」前掲)と当時から指摘されていたとおり、「異常」や「普通」といった服装間の差異が(他律的に)なくなることである。そのことによって、国民服を着れば、画一的な外面=内面をもった国民として、理念的には個々人に際は生じ得なくなる。すると今度は、それでも現実的に(たとえば身体などによって)生じた際(「異常」や「普通」)は、逃れようもなく個人の責任とみなされるであろう。

そうであれば、「私」の課題は、服装一般—国民服が課せられる戦時下の日常にあって、国民として、国民服を着用しながら、いかにして自由な内面を確保し得るかにあったはずで、それこそが「服装に就いて」が問うていた主題であり、結びの一行もこの問いへの踏み切り板として配置されていたのだ。つまり、「服装に就いて」の時代との関わりとは、単に国民服への反発・抵抗など固定的なものではなく、服装に関する「私」の失敗談を通じてそのレベルをクリアした上で、「国民服」がもたらす新たな事態に対して「如何」という問いを未来に向かって発しつつづけていることにこそみるべきなのだ。それは、さしあたりテキスト上で発された、服装に翻弄されてきた「私」への自問であるが、未来を見据えたことで、同時代の歴史や作中読者(を参照点とした読者—国民)への問いにもみえる。

〈註〉※「服装に就いて」は『太宰治全集第三巻』(筑摩書房、1989)により、ルビは省略した。

1. 井上諭一「「服装に就いて」論—異性装と国民服の間—」(『太宰治研究 7』和泉書院、2000) p. 60
2. 奥野健男『太宰治論 増補決定版』(春秋社、1968) p. 159
3. 東郷克美「フォークロアの変奏「雀こ」を視座として」(『国文学』1979・7) p. 21
4. 小林小夜「太宰治全作品事典 服装に就いて」(東郷克美編『太宰治事典』学燈社、1994) p. 60
5. 佐々木啓一『太宰治論』(和泉書院、1994) pp. 162-163
6. 註1に同じ、p. 70
7. 註1に同じ、p. 70
8. 井上雅人『洋服と日本人 国民服というモード』(広済堂出版、2001) p. 248
9. 註8に同じ、p. 42
10. ゲオルグ・L・モッセ／佐藤卓己・佐藤八寿子訳『大衆の国民化 ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化』(柏書房、1994) 参照。
11. 鷺田清一『ひとはなぜ服を着るのか』(日本放送出版協会、1998) p. 140
12. 藤原耕作「太宰治文学における〈服装〉」(『大分大学教育福祉学部研究紀要』2004・4) p. 98。なお、同論ではもう一点、《外界の天候を左右する》という《機能》も併せて指摘されている (p. 98)
13. 北山晴一『衣服は肉体になにを与えたか 現代モードの社会学』(朝日新聞社、1999) p. 185
14. 神谷忠孝「太宰治と服装—おしゃれ志向と乞食姿と—」(『湘南文学』1995・5) p. 75
15. たとえば「男子国民服を俎上に 各方面の批判を聴く」(『読売新聞』1939・1・14、p. 5) には、吉田謙吉「活動力に欠けた感じ」・石井柏亭「感心出来ない襟とズボン」・早川孝太郎「耕作には全く不向」・藤田嗣治「不徹底な

和洋折衷」・中村光甫「上着の襟より下着にカラー」といった批判が並んでいる。また林生「読者眼 国民服はわれ等に」（『読売新聞』1941・2・23、p.2）が指摘する《物資節約の今日は有るものは何でも引出して使用し、出来るだけ、新調しないのが国策に協力する道》といった批判も根強くあった。なお、戦後、獅子文六は「国民服史」（『改造』1946・3、p.75-76）で国民服に言及し、《日本服飾史上これほど早く流行し、まやこれほど早く捨てられた服装もあるまい》、《国民服は決して評判がよくなかった。天振りで国民の服装をきめるといふことが、反感の基礎であつた》と振り返っている。

松本和也（まつもとかつや）

立教大学大学院修了。現在、信州大学人文学部准教授。専門は日本の近・現代文学および日本現代演劇史。主に太宰治とその活動期である昭和10年代の文学シーンについて研究活動を行っている。主著に『昭和十年前後の太宰治〈青年〉・メディア・テキスト』（2009年）、『現代女性作家論』（2011年）、『川上弘美を読む』（2013年）。

（※肩書は掲載時のものです）